

「はままつ演劇フェスティバル2023」劇評

○劇団からっかぜ『もやしの唄』

2023. 12. 3 クリエイト浜松 11時回

会場は満席。年齢制の幅広さは、長年根付いた劇団への信頼の証だろうと感じる。1960年代中頃、小さなもやし工場「泉商店」が舞台。月日の流れはあるが、原則、その工場で物語は繰り広げられる。泉商店の店主である恵五郎と働き始めて一週間の村松、手伝いに入っている久里子、その親族や近い人たちの「心」を見せる舞台だと思った。登場人物たちは、直面する問題に「折り合い」を付けて人生を歩んでいる。時代の流れで、大量生産になっていく「もやし」、好きな人に思いを伝えられず側にいること、生まれてきたときから決まっているルールへの抵抗、それでも人は生きて行くし、時間は立ち止まらない。反面、「かわらなくてもよかったのにね」という言葉にも真理が宿る。

演じる役者陣は誰も、動きに声、どれもとても良かった。台本の特徴か、一人がつかつかと台詞を話す場面が多い。一部、苦勞して台詞を出している印象の場面もあったが、多くはそう感じさせなかった。美術の完成度の高さも、小さなもやし工場を舞台に描くのに力強かった。

もやしが成長するときの唄に癒やされる、または、勇気づけられる人たち。実直な作品、実直な演技、実直なスタッフワーク、どれも満足度の高い舞台だった。

○MUNA-POCKET COFFEEHOUSE『幸福な王子、お化け屋敷へ行く。』

2023. 12. 9 なゆた浜北 11時回

会場に入ると、スモークと照明で別世界の舞台が出来ていた。ダブルキャストだが、今回はキャスト A の舞台を観劇。作品自体にも、公演にも、仕掛けが多くちりばめられていた。作品に込められた仕掛けは特に巧妙で、言葉の掛け違いが後に焦点が合うように意味を出し、腑に落ちていると、それらはさらに別の暗喩だったり。ラストシーンには、どきりとするほどの演出が積み重ねていき、しっかりと舞台を締めた。

終始、舞台を演出をしているというより、この空間全体を演出していると感じた。役者もうまく、奇妙な会話のやりとりが一方通行にならずに成立していた。

演者、演出、映像、音、どれも世界を描くのに素晴らしかった。

○シニア劇団浪漫座『源氏物語』

2023. 12. 17 浜松市勤労会館 14時回

開場の30分前に到着したら、既に第二駐車場までほぼ満車で、盛況。その後の来客者はどうするのだろうとふと考えたが、帰りを見ると、駐車場内の通路に車を敷き詰めていた。「車が出せない」という声があちらこちらから聞こえていた。

客席も満席で、舞台を待つ熱気を感じる。幕が上がると同時に大きな拍手が起こった。観客に愛されているのは、舞台に立つ人たちが日常生活においても、愛されているのだろう。多くの方たちが、この劇団の公演を毎回、楽しみにされている。それは凄いことだ。役者さんたちの演技は個性豊かで、客席を大いに沸かせていた。間では踊りや演奏も楽しませる力があつた。

○といしば企画『ファニー・マネー』

2023. 12, 24 浜北文化センター小ホール 11時回

幕が上がると、部屋の一室をきちんと作り上げた美術に客席が少しどよめいた。美術、衣装、小道具、舞台が進むほどに、どれほどこのレイ・クーニーの作品を大切に思って、情熱を持っているのかが伝わった。場所と時代を越えて愛されてきた脚本だが、役者泣かせの脚本でもある。独特の台詞の調子に、求められるスピード、振り回されず演じきるのは難しい。実際、苦勞する場面もあつたが、それも折り込み済みか、乗り切り、最後は正しい場所に着地させ、カーテンコールでは出演者に大きな拍手が送られた。

個性溢れる役者の面々が曲者の登場人物を描くことに成功していた。大きな情熱を持って立ち向かったキャスト・スタッフが舞台の成功に導いた。